第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

クマゲラ

Dryocopus martius martius (Linnaeus, 1758)

雲野明（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）・藤巻裕蔵（公益財団法人山階鳥類研究所）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　鳥類分科会

環境省 編

令和８（２０２６）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：雲野明・藤巻裕蔵，2026．クマゲラ．環境省（編）第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 748-752.

Citation: Unno, A. and Y. Fujimaki, 2026. *Dryocopus martius martius* (Linnaeus, 1758). *In*: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 748-752.

キツツキ目 Piciformes　キツツキ科 Picidae

クマゲラ

***Dryocopus martius martius* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
本州北部では生息地がブナ林帯に限られ生息密度が非常に低く希少であり（北東北のクマゲラ出版委員会 2004）、観察地点の減少や既存の営巣地での繁殖が確認できなくなるなど（藤井 2021）、個体数減少の可能性がある。本州北部における繁殖活動については、青森県では 2008 年度に白神山地で、秋田県では 2014 年度に森吉山ノ口川流域で確認されたものが最後である（藤井 2021）。
なお、本亜種の主要な生息域である北海道では、好適な生息地で最も生息密度が高いと推定される東大富良野演習林でも巣間距離の平均距離は約 2 km であり（有沢 1991）、生息条件が悪化した場合は生息密度は減少すると推定される。また、森林の少ない平野部ではほとんど生息せず（藤巻 2013）、高標高域の生息密度は不明な点が多く、潜在的な生息可能範囲はそれほど広くない可能性がある。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

北海道、本州北部の森林に留鳥として生息する大型のキツツキ。大径木の幹に巣穴を掘り、多くは 5 月上旬に産卵し、約 2 週間の抱卵期、1 カ月弱の育雛期を経て、幼鳥は 6 月上旬～7 月上旬に巣立つ。主にアリ類などの昆虫を食べる。生息密度は 1 つがい/250～300 ha から所によっては 1 つがい/1,000 ha 以上である。過去の森林伐採により生息に適した森林が減少した。

基礎情報

【形態】

全長 46 cm。体は黒く、オスの額から後頭部かけては赤く、メスでは後頭部だけが赤い。嘴は黄白色で、脚は黒い。虹彩は淡黄色である。キタタキ（*Dryocopus javensis richardsi*）の腹は白く、オスでは赤い顎線があり、メスでは頭全体が黒く赤い部分はない。それ以外のキツツキ類とは体の大きさや体の模様で識別できる。

【生活史】

留鳥。主に昆虫、特にアリ類を好んで食べる。秋～冬には木の実なども食べる。営巣には、胸高直径がおおむね 40 cm 以上で、幹が通直、かつ下枝の位置が高く、樹皮が滑らかな木が選ばれる。このような木の幹に、地上 2～18 m の高さに巣穴を掘って営巣する（石城ほか 1987、磯・藤巻 1990、有沢 1991）。5 月上旬頃に産卵し、一腹卵数は 3～6 卵（清棲 1965）、抱卵期約 2 週間、育雛期 1 カ月弱、幼鳥は 6 月上旬～7 月上旬に巣立つ。雌雄とも抱卵、育雛を行うが、夜間の抱卵と育雛初期の抱雛はオスが行う。親は巣立後しばらく幼鳥に給餌をし、10 月頃から家族としてのまとまりはなくなる（小西ほか 1993、北東北のクマゲラ出版委員会 2004）。親は繁殖した地域に留まるが、冬にはまれに平野部の孤立林に飛来することがある。

【生息環境】

北海道ではかつて、大径木やアリ類の生息する腐朽木が多く存在する広大な針広混交林や落葉広葉樹林などの天然林に生息していることが多かった。しかし近年では、植栽木の成長にともない、人工林の多い地域にも生息するようになった。トドマツ人工林での繁殖（隅田・有沢 1992）や、カラマツ人工林での繁殖が確認されている（雲野 未発表）。一方で、本州北部ではブナ林に強く依存して生息している。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

種クマゲラ（*Dryocopus martius*）はスカンディナビアから東はオホーツク海沿岸部、カムチャツカ、サハリンまで、南はアルタイ、朝鮮半島、日本まで分布する。日本では亜種 *Dryocopus martius martius* が北海道全域、及び本州北部の一部に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道では、現在も北海道全域に生息しており分布域の縮小はみられない。本州北部では、観察地点の減少が報告されているため（藤井 2021）、分布域が縮小している可能性がある。

【生息地の現況】

北海道では、天然林における伐採の減少や戦後に植栽した人工林の成熟により人工林内での繁殖事例が確認されるなど、生息地の環境は改善しつつある。本州北部では限られた地域のブナを主体とした落葉広葉樹林のみで生息が確認されているが、周辺地域で伐採が行われた事例があるなど（藤井 2021）、生息環境は大きく改善されていないと推測される。

【個体数の現況】

2016～2021 年に調査が実施された全国鳥類繁殖分布調査（植田・植村 2021）によると、北海道では過去 2 回よりも記録メッシュ数が増えた。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても、36 地点から 60 地点へと増加しており、個体数の増加が推測される。本州北部では、観察地点の減少や既存の営巣地での繁殖が確認できなくなるなど（藤井 2021）、個体数減少の可能性があるが不明な点が多い。北海道と本州北部の個体群はそれぞれ大陸の個体群とは隔離している。現在、北海道と本州北部の個体群間に遺伝的交流があるかは不明である。

存続を脅かす要因

森林伐採による生息適地の減少や悪化、人為的な圧力として繁殖期における営巣木への不用意な接近などが考えられる。テンや外来種のアライグマによる捕食の影響も想定されるが、詳細については不明である。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，その他（繁殖期における営巣木への人間の接近）
	（現在）	森林伐採，その他（繁殖期における営巣木への人間の接近）

特記事項

本州北部の個体群は危機的状況にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2019：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2018：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2017：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次 2015：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第４次：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第３次：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第２次：	クマゲラ	*Dryocopus martius martius*	VU
第１次：	クマゲラ	*Dryocopus martius*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【秋田県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【山形県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物，鳥獣保護管理法

参考文献

- 秋田県環境保健部自然保護課，1978．クマゲラ調査報告書（昭和 52、53 年）．秋田県環境保健部自然保護課，秋田．
- 有沢浩，1974．北国の森の博物誌．河出書房新社，東京．294pp.
- 有沢浩，1991．クマゲラの営巣木密度及び営巣木．東京大学農学部附属演習林北海道演習林報告，84: 21‐37．
- 有沢浩，1993．クマゲラの森から．朝日新聞社，東京．230pp.
- 藤井忠志，2012．総説「日本のクマゲラ」．岩手県立博物館調査研究報告書，29: 1-39．
- 藤井忠志，2021．クマゲラの生態と本州における研究小史．日本鳥学会誌，70: 1-18．
- 藤巻裕蔵，2013．北海道におけるクマゲラの繁殖期の分布．山階鳥類学雑誌，45: 39-45．
- 北海道保健環境部自然保護課，1990．野生動物分布等実態調査報告書　クマゲラ生態等調査報告書．北海道保健環境部自然保護課，札幌．109pp.
- 北海道教育委員会，1977．エゾシマフクロウ・クマゲラ特別調査報告書．北海道教育委員会，札幌．82pp.
- 石城謙吉・楠本義治・市瀬克也・斉藤隆，1987．クマゲラのヒナの外部形態と繁殖生態に関する記載．北海道大学農学部演習林研究報告，44: 225-230．
- 磯清志・藤巻裕蔵，1990．北海道中部におけるクマゲラの営巣環境と営巣木の性質．日本鳥学会誌，38: 157-165．
- 環境庁，1976．クマゲラ．昭和 50 年度特殊鳥類等調査，環境庁，東京．
- 北東北のクマゲラ出版委員会，2004．北東北のクマゲラ．東奥日報社，青森．123pp.
- 清棲幸保，1965．増補新訂版　日本鳥類大図鑑Ⅰ．pp. 410-413．講談社，東京．
- Kojima, K. and H. Arisawa, 1983. Habitat and food habit of the black woodpecker *Dryocopus martius* in Hokkaido. Tori, 32: 109-111.
- 小西弘臣・鈴木利典・玉田克巳・藤巻裕蔵，1993．北海道中央部におけるクマゲラの繁殖生態．山階鳥類研究所研究報告，25: 76-92．
- 小笠原暠・泉祐一，1977．森吉山地域のブナ林及びその周辺におけるクマゲラの生息状況．山階鳥類研究所研究報告，9: 213-243．
- Ogasawara, K., Y. Izumi, and T. Fujii, 1994. The status of black woodpecker in Northern Tohoku District, Japan. 山階鳥類研究所研究報告，26: 87-98.

- 小笠原暠・千羽晋示，1986．白神山地のクマゲラ 本州のクマゲラの保護とその生息地保全の必要性．白神山地のブナ林生態系の保全調査報告書，鳥類．
- 隅田重義・有沢浩，1992．トドマツ人工林におけるクマゲラの繁殖例．日本森林学会北海道支部論文集，40: 12-14．
- 植田睦之・植村慎吾，2021．自然環境保全基礎調査．全国鳥類繁殖分布調査報告，日本の鳥の今を描こう．2016-2021 年，p. 83．鳥類繁殖分布調査会，東京．
- 雲野明，2011．鳥類生態図鑑 クマゲラ．Bird Research News，8(12): 1-3．

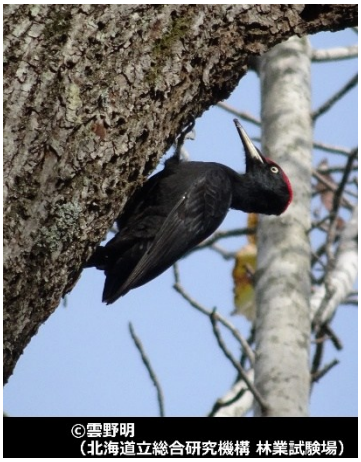
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dryocopus martius martius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dryocopus martius martius* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Other
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.





執筆者: Author:	雲野明（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）・藤巻裕蔵（公益財団法人山階鳥類研究所） Akira Unno and Yuzo Fujimaki

公表年月：2026 年 3 月